



日本の目覚めは 世界の夜明け

～ 今蘇る縄文の心
長堀 優



はじめに — 繩文の「靈性」を呼び覚ます

今、世界は大きな分岐点にさしかかっています。

物質的な豊かさや、経済効率を追い求めてきた先進国の社会システムは、私たちの生活を格段に便利なものにしてくれたことは間違いないありません。しかし、その一方で、モノに溢れた裕福な社会が、人々の心に安寧をもたらしたのかと言えば、大いに疑問が残るところです。それは、世界的な貧富の差の拡大や資源の枯渇、先進国における荒れた世情を見れば明らかです。

将来に目を転じて、モノが有限である以上、飽くなき欲望のままに、自分が手に入れることだけを考えていては、今の社会、経済システムが長く続くわけはありません。環境もエネルギーも医療もはやまったなし、いつ破局が来てもおかしくありません。

現代の社会は、沈みゆくタイタニック号のデッキで椅子とりゲームでもしているようなもの、とも表現されます。いまや、人類は、モノに振り回され、本来の生き方を見失い、魔法使いの弟子のように、自分たちの手で生み出したものに、自分たちが追い回されるような状況を作り上げてしまったのです。

残念ながら、モノや金の充足は、心の平穩にはつながらなかったようです。「足る」ことを知らない欲望は膨れ上がりつづけ、人と人、国と国との争いを引き起こすばかりでなく、時として自分自身をも追い詰めていきます。そして、ついに我が国は、毎年の自殺者が3万人を超えるような社会になってしまいました。

しかしながら、ここまで情勢が切羽詰まり、先が見通せない状況になつてはじめて、わずかながらではあつても、変化が起き始めたように私には感じられるのです。

人間を真に幸せにするのは、どうやらモノやお金ではないらしい……、そのことに、今、少なからぬ人が気がつき始めているのではないのでしょうか。

物質文明の限界が見え、これまでの常識が通用しなくなつてきた今、混沌とした視界の中に、私には、進むべき一筋の道が見え始めてきたようにも思えます。

「大切なものはね、目には見えないんだよ。目では見えない、心で探さないと」(サン・テグジュペリ『星の王子さま』)

サン・テグジュペリは、物質至上主義が跋扈し、心が無いがしろにされる世の行く末を見通していたかのようです。この言葉は、人生で本当に必要なもの、これからの世界で必要とされる心構えを、簡潔に言い表しているように感じます。

あの東日本大震災の日、鎌倉市に住んでいた私は、停電で暗闇となった町を歩いて帰宅

しました。途中通りかかったコンビニを覗いてみると、真つ暗な店内では、買い物客たちが、静かに並んで順番を待っていました。さらによく見ると、なんとレジでは、懐中電灯のわずかな明かりの下でお釣りの受け渡しをしているではありませんか。

自分の家のことが心配であるはずなのに、暗い中で仕事を続ける従業員も、イライラすることなく黙って長い列に並ぶ客たちも、どちらもお見事な態度でした。店の片隅の商品を黙って持つていくことはできたでしょう。しかし、見ていた限り、そのような人は誰もいませんでした。私には、大地震で心身に受けた激しい衝撃を、取り乱すことなく皆で静かに共有し、労りあい、癒しあっているような空間にも思えたのです。

このような日本人の行動は、鎌倉だけではありませんでした。おなじように胸を打つ光景が、被災地のあちこちでもみられ、後に世界に報道されるや大絶賛を浴びたのです。日本では、皆が「ごく普通に」行うことが、世界的に見ると、全く普通ではなかったのです。世界から集まった称賛に、一番戸惑ったのは日本人だったのかもしれない。

かつて救命救急センターを備える大きな病院に勤務していた時のことです。

深夜、バイクと乗用車の接触事故により、重傷を負った患者さんが搬送されてきました。全身打撲による出血のため血圧が極端に下がっていました。救急待機当番であったため連絡を受けた私はすぐさま登院し、救急部のドクターとの協議に入りました。そして、腹部

臓器からの出血が確認されたため、緊急で開腹手術が必要との判断に至りました。

術前の説明にうかがうと、目に涙をいっぱい溜めた奥さんと、2人の娘さんが私のほうを見ました。上のお子さんは10歳前後、下のお子さんは幼稚園か小学生の低学年くらいで、当時同じような年頃であった私の2人の娘の姿と重なり、まったく他人事とは思えなくなりました。

ご家族へはすでに、たいへん危険な状態であることが伝えられていました。私からは、手術の必要性と全力を尽くす由を、手短かに説明するにとどめました。すると、夜中にもかかわらず、奥さんに引き続き年長の娘さんが立ち上がり、しっかりと健気に「お願いします」といつてくれたのです。私は、その姿に強く胸を打たれました。その傍らで、眠そうに呆然とする幼い妹さんの姿が痛々しい限りでした。この娘さんたちのためにもなんとか皆でがんばらなくては、と私は決意を新たにし、一礼を捧げ部屋をでました。

いよいよ出棟時間となり、「おとうさん、がんばってね」という家族全員からの励ましにしっかりと答えながら、患者さんは手術室に入りました。手術が始まり開腹すると、出血源は脾臓という比較的小さな臓器であることがわかりました。傷ついた脾臓を取り出すことにより、止血は短時間で終わることができました。しかし、手術を終え、輸血を行っても低下した血圧が戻ることはありませんでした。出血は、腹部だけではなく骨盤の骨折部

からも続いていたからです。

他の療法により迅速に出血のコントロールを図らなくてはならない状況でした。大至急で手術室からICU（集中治療室）に引返しましたが、皆の努力も虚しく、血圧、脈拍ともに下がり続け、残念ながらもう次の処置が行える状況ではなくなりました。

主治医である救急部のドクターが、ご家族を呼びいれ、これ以上手だてが残されていない状況を説明すると、奥さんは立っていられなくなり、力なく座り込んでしまいました。すると、驚いたことに、まだ幼い顔の年長の娘さんが、「おかあさんしっかり、おかあさんがしっかりしないと」といって母親を抱き上げようとしたのです。なんとしっかりした頼もしい娘さんであることでしょう。普段の家庭生活でのしつけが偲ばれる思いがしました。

しかし、ついに、最期のときが訪れました。

ICUにご家族の悲しみが響き渡ります。ご家族の隣では、急ぎ駆けつけた高齢の父親と思われる男性が、黙って涙をこらえていました。先ほどあれほど気丈に振舞っていた上の娘さんがついに堪えきれず、床に座り込んで泣き崩れてしまいました。しかし、今度は、奥さんがその肩をやさしく抱いて慰めます。

ややしばらくたってから、奥さんが娘さんたちに、「さあ、お父さんにお礼を言いましょね」と静かに語りかけました。すると、うずくまり泣いていた娘さんたちは、なんとか

気を取り直し、覚束ない足元にもかかわらず、お互い支えあうようにして父親のそばに近づいていきました。そして、震える声で「おとうさん、いままでありがとう……」と亡き父の耳元に語り掛けたのです。

これには、私を含めその場に居合わせたスタッフ全員が心を揺さぶられ、堪えきれずにもらい泣きしてしまいました。あまりにもつらい家族の光景でした。時は12月、この事故さえなければ、まもなく楽しいクリスマスを家族で迎えられていたことでしょう。愛情深い家族をこんな目にあわせた事故がつくづく恨めしく思われました。

一段落した後、赤々とした朝陽が窓から差し込み始めた医局に戻った私は、一人机にうつ伏し忍び泣きました。救急医療において、これほどつらい経験をしたのは後にも先にもこのときだけでした。

この無慈悲極まりない別れのなかに、どこか救いがあるとすれば、この残されたご家族が、過酷な運命を受け入れ、自分たちを守り育ててくれた父親に、愛と感謝を伝えるように懸命に努力していた姿ではないでしょうか。これほどの悲しみの中で健気に行動していたお子さんも、しっかりとしつづけをされてきた奥さんも誠に立派でした。一瞬にして幸せを奪われた母娘の悲しみはいかばかりであったことでしょう。しかし、それでもこの母娘は、必ず立ち直り、前に進んでいけるはず、と私には思えたのです。あまりにも酷いこの試練に

負けることなく、この先もしつかり生きていってほしい、昇りつつある朝日を見つめながら、私は強く願いました。

このご家族の気高いふるまいは、大震災発生時に、世界の賞賛を集めた日本人の行動に相通じるものがあるように感じます。

考えてみれば、たった一つの受精卵から、この精妙極まりない生命体が出来上がっていることも驚異なら、心臓の拍動や呼吸が、眠っている間も規則正しく保たれることも、間違はなく奇跡です。たかだか人類の知力ごときでは推し量ることのできない、偉大な宇宙の摂理によって、地球上の生命全てが生かされています。生きていることは決して当たり前ではありません。生きていることはそれだけでものすごいことなのです。

このように、生かされているという奇跡に気づき、感謝できるようになれば、私たちを生かしてくれる存在への絶対の信頼感が生じてきます。そして、この目に見えない超越者への感謝と信頼感は、やはり日本人特有の言い回しである「おかげさま」という言葉に集約され、謙虚さを美德とする生き方に繋がってきたのです。

近年続いている大震災や激甚災害を通じ、日本人は、生きていることは当たり前ではないという厳然たる現実を思い出しつつあるように感じています。そして、日本人が本来持っているはずの感謝と謙虚さが、いま再び、呼び覚まされてきているのではないのでしょうか。

日本人の遺伝子に組み込まれた「愛と調和、分かち合い」の精神は、物質的にも精神的にも行き詰まった現在のこの世界に、必ず必要とされてくるはずだ。

現代の文明生活から得た恩恵は否定しませんが、しかし、自分たちの記憶の奥深くに眠っているはずの礼節、道徳心をしっかりと呼び戻すことができれば、社会はもっと良くなることでしょう。

日本人の生き方、考え方がどのようにできあがってきたのか、その原点は、これまであまり注目されてこなかった遙かいにしへの時代にある、と私は考えています。

1998年、青森県外ヶ浜町にある大平山元遺跡において発見された土器の中には、推定1万6千5百年前とされたものがありました。紛うことなき世界で最も古い土器です。しかも、縄文時代に埋葬された人骨からは争ったあとがほとんどありません。つまり、縄文という時代が、豊かな風土と食に恵まれ、世界にも類を見ないほどの高度な文明を築き、1万年以上にわたって集団で人が殺しあうことのなかった平和な時代だったことがわかってきたのです。日本人の精神性は、この時代から、悠久の歴史の中で培われ、育てられてきたともいえるでしょう。

全ての存在に靈性（靈性）ではありません、その理由は本書のなかで（を感じ、厳しくも慈しみ深い自然を崇拜し、人、そしてすべての生き物と共存し、愛と調和の中で平和な社会を

営んでいた縄文時代、この時代の生き方を思い出し、世界に広げていくことこそが、現代に生きる私たち日本人の使命なのではないかと私は思います。日本人が、「おかげさま」という心持ちとともに、大いなる存在に限りない感謝を捧げながら、この列島の上で生き抜いてきたことを、今こそ思い出す必要があるのです。

本文の中でも触れますが、私たち日本人は、「おかげさま」と対を為す「おひかりさま」に感謝を捧げ、主語のない日本語の中で育ち、エゴの意識を縮小させながら暮らしてきました。本書では、その原点ともいえる縄文時代に思いを馳せつつ、近年続いている考古学的発見や、気骨ある日本の先人たちの生き方から見えてくる、これまでとは少し違った日本の姿に迫ってみたいと考えます。

歴史が進むとともに人類も社会も進化する、という右肩上がりの神話が、自分の中で崩れ始めていることを私は感じています。文明の発展は、確かに暮らしを便利にしてくれましたが、競争に明け暮れ、殺伐とした社会に翻弄され、心奪われているうちに、私たち日本人の精神は擦り切れ、本来の自分の姿をすっかり見失ってしまったようです。このような状況から脱却し、皆が幸せに生きられる社会を造り上げていくためのヒントは、遠く歴史を遡った縄文時代にある、と私は考えています。縄文からのDNAを宿す日本人が、本来の在り方を取り戻し、自信を持って前に進むこと、そこに大げさではなく、世界の将来がかかっ

ているとさえ感じます。

本文中には、敬愛する先達やたくさんの方々が実名で登場します。誰もが、さまざまなきや信じられないような奇跡を私に与えてくれました。ここに登場するすべての人たちが本書の共著者です。

登場される方々はもちろん、今回の出版でもたいへんお世話になったくぼ出版の熊谷えり子様、かけがえのないご縁をつないでくれた姉夫妻と私の娘たち、そして私を支え続けてくれた妻に、この場を借りて、心からの感謝を奉げたいと思います。

2016年 11月吉日

長堀 優